



女子大学生 × ジェンダー調査報告書

2020



ジェンダー平等の実現なしに
持続可能な開発目標 (SDGs) の達成はできないと考える
ユースチームが実施したジェンダーに関する調査報告



わたしが変わる。
未来が変わる。

girl scouts



つぶやき

この調査を企画したメンバーの一人の声を紹介します。

私は小さいころから、どうして自分は女の子なんだろう？ と思っていました。言葉遣いが汚いこと、たくさん食べること、帰ってくるのが遅いこと、いろいろなことで怒られていました。怒られていた理由は、私が「女の子だから」ではないと思います。でも、なんとなく心のどこかで、男の子ならここまで怒られていないんじゃないか？ と思ってしまう気持ちがありました。

大人になった今は、化粧をすることはマナーだとか、一人旅は危ないとか、家事ができないとだめだとか、そんなことを言われます。もちろんなんでもできるに越したことはないし、きれいな方が良くかもしれません。でもそれは、性別に関係があるのでしょうか？ 女の子だから、男の子だからやらなきゃいけないこと、やってはいけないことなんてあるのでしょうか？ 私は、誰が何をしてもいいのにな、と思います。

性別によって、無理矢理やらされることがあったり、挑戦する機会が失われたら、それはもったいないと思うのです。自分が好きなことや自分がやりたいことを「やる」と言える世の中になったらいいなと思っています。

この報告書には、ジェンダー平等の実現がさらに望まれる今だからこそ、知ってもらいたい女性の本音がつまっています。

私たちの考えが、女性の気持ちが、多くの人に伝わりますように。

目次

つぶやき 1

01 この調査について 3

02 ジェンダー 6

03 家庭 × ジェンダー

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」はもう古い!	7
考えてみよう 1. 女子大学生はどう考えているか。	8
みんなの声	9

04 ライフイベント × ジェンダー

女の子の就職って実際どうなの?	10
みんなの声	11
イワカン — 総合職と一般職 この分け方は、いつまで続く?	11
出産と仕事	12
イワカン — 女子大学生は結婚をどう考えている?	14

05 日常生活 × ジェンダー

性的な嫌がらせや性差別のリアル	15
みんなの声	17
性的嫌がらせや性差別の経験について 高校生年代と比較する	19
「女の子」だから	21
考えてみよう 2. 性別による制限	23
イワカン — だれがサラダを取り分ける?	23

06 メディア × ジェンダー

メディアでは、男女は平等か	24
考えてみよう 3. 理想の女性はどんな人?	25
メディアのここがおかしい!	25
イワカン — おとぎ話に隠された真実に気付く	26
メディア業界のジェンダーギャップ	27
イワカン — あるテレビ局女性記者の話	27
メディアの取り組み 日本・イギリス	28
映画も広告も、男女はアンバランス	29
考えてみよう 4. メディアを分析してみよう	30

07 生理用品 × ジェンダー

生理用品は女性にとって必需品	31
イワカン — 世界では減税、無償化の動き	32

08 まとめにかえて

女子大学生たちが求めているもの	33
-----------------	----

09 あとがきにかえて

それぞれの思い	35
---------	----

10 ガールスカウトは必要なのか

なぜ、女性だけで活動するのか。	37
-----------------	----

01

この調査について

私たちの現状はどうなっているんだろう

2019年にガールスカウトでは「ジェンダー」に関する女子高校生調査を実施しました。そこでは、男女という枠組みで多くの女子高校生の可能性が狭められていることが分かりました。それを知った私たちに「女子大学生(18歳から25歳)の現状はどうなっているんだろう?」という疑問が起こったのは自然なことでした。

この調査は、そんな疑問を持った10代・20代の4人が、「女子大学生のおかれている社会の現状や意識を明らかにしたい」と、企画・実施をしたものです。

私たちは、次の三つの仮説を立てたうえで調査を実施し、回答を分析しました。

1. 女性は人生の選択の可能性を狭められている。
2. 多くの女性は性的な嫌がらせや性差別を受けたことがある。
3. 女性のあり方はメディアから大きく影響をうけている。

仮説1. 女性は人生の選択の可能性を狭められている。

「女性である」ことが、就職や結婚などの選択に大きな影響を与えていることがわかりました。

女子大学生たちの31%が「結婚をするかはまだわからない」と回答する一方、50%は「出産後同じ職場で働く」と回答しています。結婚するかは、まだ分からないが、キャリアを考える時に、「出産」というライフイベントを見据えキャリアを変更する必要があると感じていることがわかりました。

女子大学生たちのなかには、出産後は女性が子育てをするイメージがまだ、根強く残っており、出産をするならキャリア選択の余地はあまりないと考えている様子が垣間見えました。その一方、「家庭に入る」という価値観は既に古いと考える女性が増加しており、理想と現実の狭間で悩んでいる女性の姿を調査結果からみることができました。このダブルスタンダード（二重基準）の結果として、就職を考えるときに、女性であることが障害になると考えている大学生は72%いました。

仮説2. 多くの女性は性的な嫌がらせや性差別を受けたことがある。

日常生活においては、約92%の女子大学生が性的な嫌がらせや性差別を受けたことがあることがわかりました。これは、高校生年代の66%¹を大幅に上回っており、ほぼ全員とも言えるほどの数字です。さまざまな不安や恐れ、懸念や葛藤を抱えながら毎日を送っている女性が多くいるということを意味します。

仮説3. 女性のあり方はメディアから大きく影響をうけている。

メディアで「男女が平等に扱われている」と回答したのは29%に過ぎず、54%は「メディアが理想の女性像を作っている」と回答するなど、メディアが与える影響について多くの声が寄せられました。

特に「メディアが伝える理想の女性」は、美しさやしとやかさなど外見だけではなく、料理上手で家事ができ、子育てをするなどの役割に関しても伝えていることがわかりました。女子大学生たちは、女性が働くことを推進される一方で、「家庭的」でないといけなという二つのイメージの間に板挟みになっていると言えるでしょう。

今回の調査では自由記述を多く取り入れたことにより、たくさんの声を聞くことができました。ジェンダー平等の実現がさらに望まれる今だからこそ、知ってもらいたい女子大学生の本音が詰まっています。

女性たちの気持ちがより多くの人に伝わりますようにという思いを込めて、この報告書をお届けします。

 **女子大学生が「今」感じていることを知ってほしい。**

¹ ジェンダーに関する女子高校生調査報告書2019 ガールスカウト日本連盟

調査概要

調査対象 全国47都道府県の大学生年代の女性（18～25歳）
今回の調査対象全体を「女子大学生」として表記しています。

回答数 536（ガールスカウト会員216名・元会員37名・一般 283名）

調査方法 インターネット回答 全40問（選択30問、記述10問）

調査期間 2019年12月6日～2020年1月17日

アンケートにご協力くださった方々に心より感謝します。

参考にした調査

- ・「Girls' Attitudes Survey 2019」Girlguiding UK
- ・「ジェンダーに関する女子高校生調査報告書2019」ガールスカウト日本連盟
- ・内閣府 男女共同参画社会に関する世論調査 2019年
- ・東京都足立区 男女共同三角に関する区民及び大学生意識調査 2019年
- ・愛知県名古屋市長 大学生に対する男女共同参画意識の調査 2016年

数の処理について

構成比の割合は小数点以下を四捨五入しているため、合計は必ずしも100とはならない。

キーワード

- ▶ ジェンダー
社会的・文化的な性差。生物学的な性差と対比して使われる。
- ▶ 二重基準（ダブルスタンダード）
同じ状況にも関わらず、対象によって異なる基準を設けること。
- ▶ 性的役割分業
性別により役割や労働などに相違があること。家庭や社会において求められる性別役割。
- ▶ 無意識の偏見（アンコンシャス・バイアス）
人が無意識にもっている、ものの見方やとらえ方の偏り。
- ▶ アンペイド・ワーク
賃金の発生しない労働のこと。育児、介護、家事なども含まれる。その多くが女性により担われていることから男女間の不平等を引き起こしている。

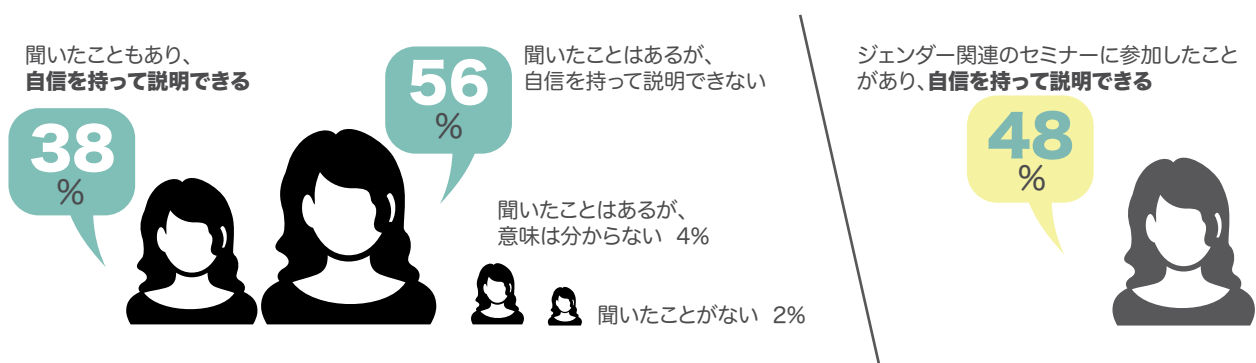


イ7カ]

このアイコン部分は、今回調査を担当した4人が日常感じている違和感や、調査をすすめるなかで感じた違和感についてまとめています。

02 ジェンダー

▶ジェンダーという言葉を知っていますか？



みんなは、どれくらい「ジェンダー」の意味を知っている？

まず、ジェンダーという言葉の認知度を調べました。その結果、ジェンダーという言葉を知ることがないという人は2%、聞いたことはあるが意味はわからないという人は4%で、ジェンダーという言葉はほぼ浸透してきているという印象を受けました。一方、その意味を自信をもって説明できるかと問われると、56%の人が「できない」と回答し、意味の理解度は十分広がっていないことがわかりました。

また、ジェンダーという言葉に対する認知度と、ジェンダーに関する授業やセミナーを受けたこととの関連性を調べました。ジェンダーの授業やセミナーを受けたことのある人は半数以上を占めましたが、その内、自信をもって説明できると答えた人は48%にとどまりました。これは、ジェンダーの授業を受けていても、その半数以上の人々がジェンダーについて説明できないことを意味します。

今回の調査をみる限り、ジェンダーという言葉自体は定着しつつあるようです。しかし、言葉の存在は知られても、その意味の理解は十分ではありません。2019年版のジェンダーギャップ指数では、日本は153カ国中121位²。他の国に比べて日本の改善度合いは緩やかで、相対的な順位は下がり続けています。ジェンダーの意味がもっと広まらない限り、日本のジェンダーをとりまく環境は改善されているとはいえません。

² 世界経済フォーラム ジェンダーギャップ指数 2019年12月発表

03

家庭×ジェンダー

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」はもう古い！

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考えは昔から根強く残っている印象があります。その一方、最近では保育士や看護師など職種の名称もかわり、主夫という言葉もしてきました。そんな変化を女子大学生はどう考えているのでしょうか。

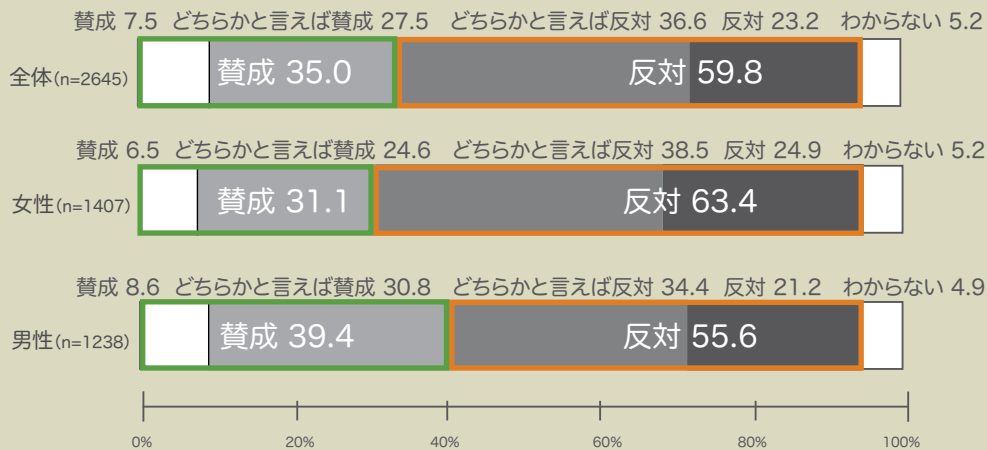
内閣府の男女共同参画社会に関する世論調査によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に「賛成」と回答した割合は35%、反対が59.8%です。これは18歳以上の全世代平均です。男女別のグラフは下のような分布になっています。

では、女子大学生はどう考えているのでしょうか？ 賛成、反対、それぞれ何%だと思いますか？

今回の調査結果を予想して、右ページのグラフを完成させてみましょう！

内閣府の男女共同参画社会に関する世論調査(2019年) 家庭生活等に関する意識

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について





考えてみよう1. 女子大学生はどう考えているか。

女子大学生の回答予想をしてみよう。

Q. 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に賛成ですか、反対ですか？

1. 今回の調査結果について、あなたの予測を書き入れよう。

・賛成

 %

・どちらかと言えば賛成

 %

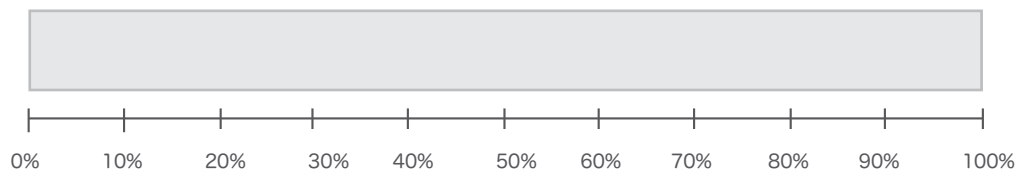
・どちらかと言えば反対

 %

・反対

 %

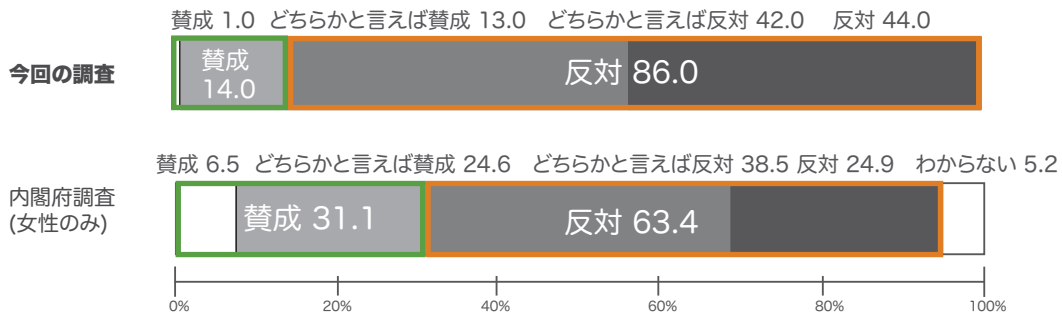
2. グラフを完成させてみよう。





考えてみよう1. 皆さんの予想は当たっていましたか。

▶「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に賛成ですか、反対ですか？



内閣府の調査(女性のみ)では、賛成が31.1%、反対が63.4%でしたが、私たちの調査では、賛成が14%、反対が86%でした。この違いは、対象が大学生年代のみであることが大きく関係していると考えられます。

また、自由記述は必須ではなかったにもかかわらず、6割以上の方が回答しており、この年代の女性の関心の高さがうかがえました。「すべき、という考えに反対」といった意見が多く見られ、性別にとらわれない選択を望んでいる人が多かったのが印象的でした。そして、「働きたい」という声が非常に多く寄せられました。

みんなの声

反対!



男女の違いでなにが違うねん!

妻だって仕事と家庭を両立できる力が夫と同じくらいあります。

女性も外で働く力を持っているし、そのために大学まで行って勉強している。性別にとらわれる必要はない。

イクメンってなんですか。自分の子どもなお風呂入れただけで褒められる、そういう状態にイクメンという言葉がついてしまっている。日本は終わってるなと思いました。

私たちは将来を自らの希望や能力などで決める。そこには自分で変えることのできない性別などは含まない。男性であれ、女性であれ、どちらでもない人であれ、職業選択や人生の進路を決める際に違いはない。

まったくもって理解できない。家庭の在り方や働き方はその人ごとに決められるべきであって、性別は関係ない。働く女性の障害であると同時に、男性の生き辛さを増進させている考え方だと思う。憤りすら覚える。

働きたい方が働くべきだと思うし、どちらも働きたければ協力して分業し、家庭を守るべきだと思う。どちらか一方しか働けない、ましてや女性は家庭の中にいなければならないという考えが古すぎる。

私は女だけどバリバリ働いて家庭を支えたいし、子どもができたら夫と一緒に育てたいから。私の親が共働きだが、私が小さい頃から2人で育ててくれた姿がかっこいいから。



「お前は稼がない」と言われるのがオチで、それは理不尽だと感じる。

母親はパートをすることで、新しい人間関係を作ることができ、自分の収入で買い物を楽しむ余裕ができた。以前より楽しそう。私は、結婚により扶養の枠内に収めるために収入に制限がかけられるのは嫌だ。このシステムの根幹にある、「男は働き、女は家事」という考えを直してほしい。

この時代、多様なツールやサービスがあふれている中で、体や力の強さは重視する必要がなくなっている。今までやれなかったことがやれる時代に、「男性が外・女性は中」という考え方は、理にかなっていないので賛同できない。

賛成!



経済的に男性の方が稼げるから。

男性女性で体力に差があり、女性は出産により生活環境や体調面が大幅に変わることがあるため、理にかなっていると思う。

自分の母が仕事を辞めて主婦になってくれたときに、家に帰ったら誰かいる空間が自分ほうれしかったから。

女が社会進出したいと声をあげても、結局そんなに変わっていないし、今もまだ男尊女卑はあるから、だったら自分の好きなことを自由にできる家にいた方がいい。

04

ライフイベント×ジェンダー

ここからは、人生設計の中でターニングポイントとなるイベントに着目します。
「大学生年代ならではの問題を知りたい」という私たちの思いから取り入れました。

女の子の就職って実際どうなの？

まずは就職です。「就活セクハラ」という言葉もある今、どれだけの人が就活のときに自分の性別を意識するのでしょうか？

▶ 就職を考える際、「女の子」であることで何か障害にあることはあると思いますか。(n=359)



回答者の中で就活を経験した人177人のうち、「過去にあった」と答えているのは、45人の25.4%でした。実際に不利益があったり差別を受ける女性は、決して少なくありません。

そして、これから就活をはじめるとする359人の72%にあたる259人は、「これからあると思う」を選択しています。自由回答からは、面接時の不平等な扱いやセクハラ、就職後の仕事の内容や受ける扱いなどについて、不安や心配、そして動揺などの声が寄せられました。前のページにあるように「夫は外、妻は家庭」ととらわれず、働きたいと答える女性が多いにもかかわらず、女性であることで差別がなくなる現実、そして、まだ就活をする前から多くの回答者が「女性」であることで、何らかの障害があると考えてしまう状況、そう考えさせてしまう社会環境は改善していくべきです。

みんなの声

これから就活する人



今は働きたいと思っているけど、実際子どもができれば、保育園とか親との連携もふまえ、キャリアウーマンはなかなか難しいと思うようになると思う。

建設現場や管理職など、女性の数が少ない分野や職場は、働きにくいのではと考える。

転職のある男性よりも、転職のある女性の方が結婚しにくいので、会社を選ぶときに素直になれないときがある。

就職をして長く働きたいと思っているが、結婚して子どもを産みたいとも思っているので、産休を取ったら仕事にブランクが出来てしまうと考えている。

進路を考える際、キャリアセンターの方に「いずれ家庭に入るのだから」と言われ、バリバリ働くつもりだったためショックだった。いずれ子どもを授かるということ考えると、出張や転勤が多い仕事は考えづらくなり、進路の幅は狭まると思う。

女性は出産のために仕事を辞めなければならない、という理由で資格取得を勧められた。

面接では、態度や笑顔や化粧など、審査ポイントが男性より多いし厳しい。そして恋愛経験を話してほしいなどというふざけた質問をされるのも女性ならではではないでしょうか。

就活でメイク、ファッションなど常識と言われる範囲内でしなきゃいけないこと。

働いている人、就活終わった人



兄弟が男しかいないので、兄弟の進学費用を懸念して、私は高卒で就職した。子どもができてからは、正社員での就職は難しいと思っている。

就活のとき人事に女性だから営業より窓口業務が多くなるかもしれないと言われた。

男の人が多い業界で、1人欠けると困る職種なため、女性を取ることで結婚出産で辞めないかどうかを懸念している様子が伝わってきた。

世の中の風潮を汲み取って、私はむしろ女性であることを武器にしようと思いました。見かけ重視だと言われていた企業のエントリーシートには綺麗に撮れた写真をはったり、面接のために普段はしないメイクをしたり、結局男女が区別されることを利用してしまいました。

海外に進路を決めたが、一人娘ということで、「お父さん、よく許してくれたね。」と何度も言われた。「よくお母さん許してくれたね。」とはあまり言われなかったうえ、自分が男の子だったら言われなだらうと思った。

契約職員で繋いでいくつもりなので、妊娠・出産・子育てによるブランクで自分のキャリアが断絶されないかが心配。



総合職と一般職 この分け方は、いつまで続く？

「総合職ってどういう意味？」日本での就職活動を目の前にした留学生に聞かれました。なぜなら海外では全員が、「営業」「マーケティング」「デザイン」など専門職採用だからです。

ではなぜ日本では「総合職」と「一般職」で採用されるのでしょうか？

総合職は管理職を目指す進路を歩む職で、一般職は事務職で転勤がなく、昇進もないのが主な特徴といわれています。これは1986年に男女雇用機会均等法が制定されたときにできた職種です。それまで女性が担っていた仕事は一般職という名前がつけられ、女性はすぐに結婚・退職すると想定されるため、基本的に昇進はない、という歴史が刻まれています。そのためか、今でも総合職として働いている女性の数は男性に比べて少ないです。

- ・この職種の違いは今後も続くのでしょうか？
- ・そして、仕事での男女差はなくなるのでしょうか？
- ・それとも変化していくのでしょうか？

出産と仕事

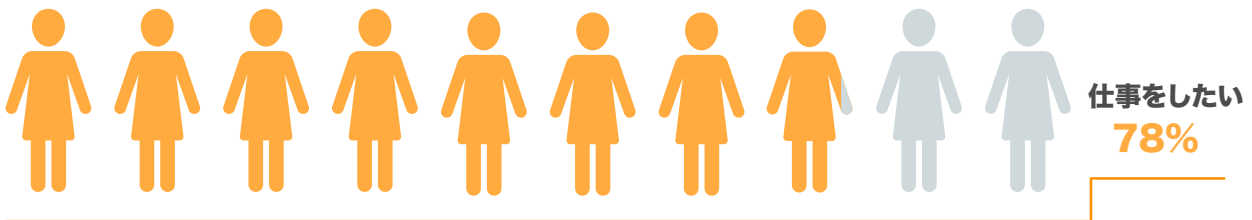


妊娠と出産は、生物学的に女性に起こることで、一時的であっても仕事を中断することになります。そのため、就活で将来を考える女子大学生にとって、出産は人生の優先順位やキャリア形成を考えるうえで大きな要素です。

今回「出産後の仕事」について尋ねてみると、回答者の半数が「出産後も同じ仕事を続けたい」と考えていることがわかりました。

その次に多い回答は、「子育てしやすい環境に変えて仕事を続ける」「退職し、子育てが落ち着いたら再び仕事をする」というように、仕事をするうえで「子育て」を優先する回答が続きます。

▶ 出産後の仕事についてどのように考えますか。 (n=536)



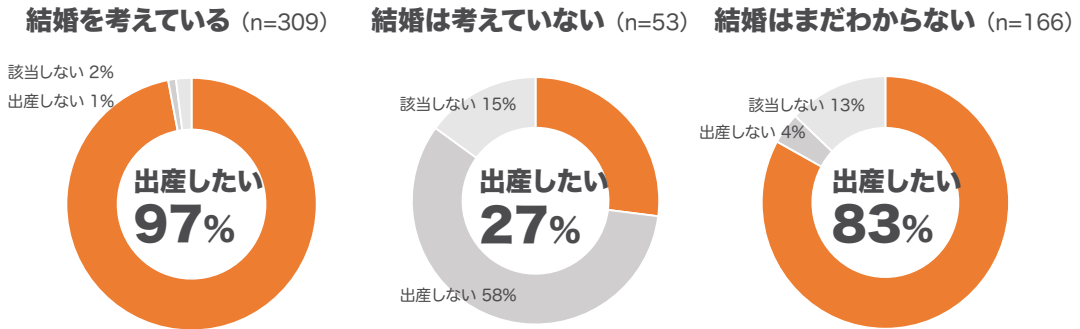
・出産後、できるだけ同じ職場で仕事を続ける	50%
・出産後、子育てしやすい環境に変えて仕事を続ける	19%
・出産後、退職する。子育てが落ち着いたら再び仕事をする	9%
・出産後、退職し、その後は仕事をしない	1%
・出産はしない	7%
・どれも該当しない	7%
・無回答	7%

これから就活を始める人の「就活について」の自由回答の中には、出産を意識し、将来を考えている意見がありました。

- ・産休、育休を取る場合採用されにくい。
- ・出産後も同じように働かせてもらえる職がなかなかない。
- ・妊娠や子育てなどでキャリアを妥協しなければならなくなるかもしれない。

「出産・子育てをする」選択と「仕事を続ける」選択、そのどちらかしか取れないと、不安を抱えている人が多くいました。女性たちが不安を感じずに将来を描くことができる日が一日も早く訪れることが求められます。

▶ 出産についてどのように考えているか。



結婚と出産に関する回答の関係を見ていくと興味深いことがわかりました。それは、結婚に対してはビジョンを持っていない人も、出産についてはより明確な考えを持っているということです。

上のグラフは結婚と出産に関する2問をクロス集計したものです。結婚に対する意向を尋ねた質問の回答を、「結婚は考えていない」「結婚を考慮している」「まだわからない」の3つの回答でまとめました。

これを見ると、結婚に対するビジョンに関わらず、出産を想定している人が大多数を占めることです。特に結婚に対しては「わからない」と回答した8割以上が出産を想定していることはとても興味深いです。



働くことにはビジョンを持って取り組んでいるが、その仕事も、出産が自分にとっての転機になる、と考えている。



イ7カJ 女子大学生は結婚をどう考えている？

結婚をするかしないだけでなく、結婚の形も多様化しています。

日本では、「法律に基づく結婚」とは、役所に婚姻届を出して法律上一組の男女が夫婦となることで、この形だけが正式に承認されている結婚です。

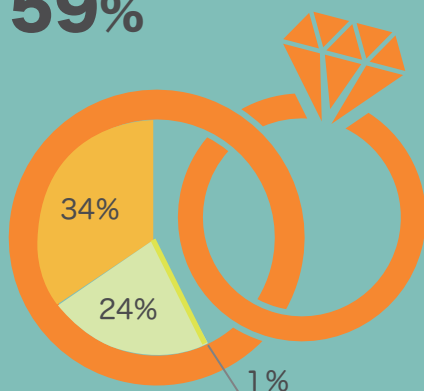
本調査では「法律や形式にこだわらない」と回答した人が2割を超えました。そこには、姓に縛られることに抵抗がある人や、多様性を認めるべきという声が聞かれました。しかし現在の日本は姓の変更や異性同士の結婚を前提としています。社会での暮らしやすさを考慮して、「法律に基づく結婚」を考えている人が多くいます。法律が人の気持ちや実態に追いつく日はいつ来るのでしょうか。

結婚に対する考え方と、出産後の仕事についての考え方の関係性について調べました。

▶ 結婚についてどのように考えていますか。(n=534)

結婚を考えている・既に結婚しているの合計

59%



法律に基づく結婚を考えている

34%



まだわからない

31%



結婚や形式には、こだわらないが結婚を考えている

24%



結婚は考えていない

10%



既に結婚している

1%

05

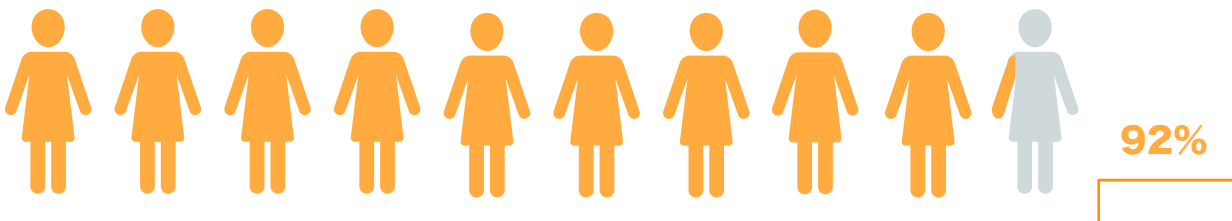
日常生活×ジェンダー

性的な嫌がらせや性差別のリアル

92%の人が「性的な嫌がらせや性差別」に触れる経験があると回答したことは、大きな衝撃です。そして、女子大学生たちの83%は、メディアから「性的な嫌がらせや差別的な表現を感じている」と回答しています。メディアやインターネットは発信者の考えを反映し、受け手に不快な思いをさせるだけでなく、意識にも大きな影響を及ぼしています。例えば、メディアから伝えられる古いジェンダー観が、差別や嫌がらせを助長しています。その他の項目では、職場でのお茶くみや家庭での役割など、昔からある性差別が多く挙げられました。

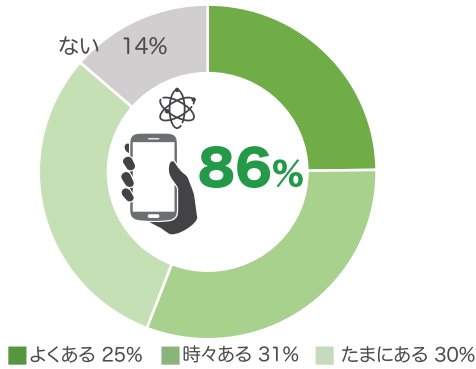
(詳しくは06.メディア×ジェンダーの章を参照)

▶ 普段の生活で、性的な嫌がらせや差別を経験したり見たりする (n=536)

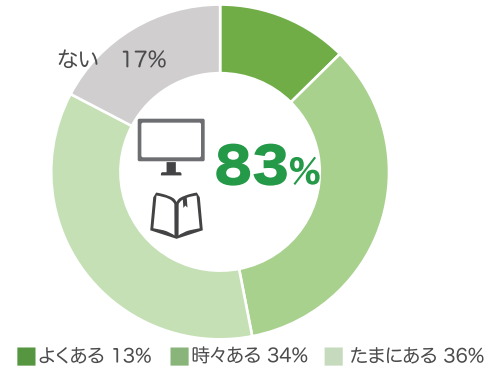


▶ 普段の生活で、性的な嫌がらせや差別を経験したり見たりする

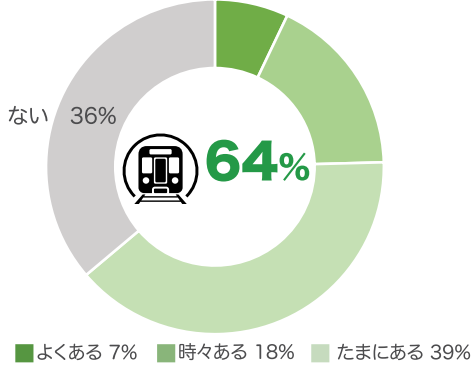
インターネット



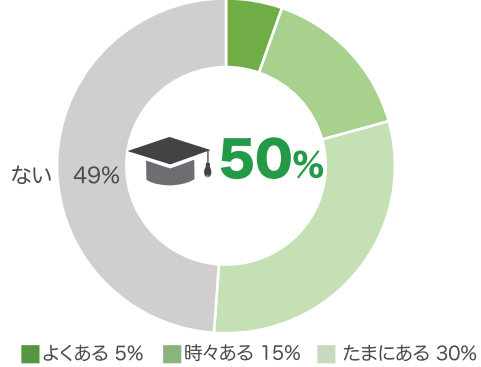
メディア (TV・雑誌・映画・広告など)



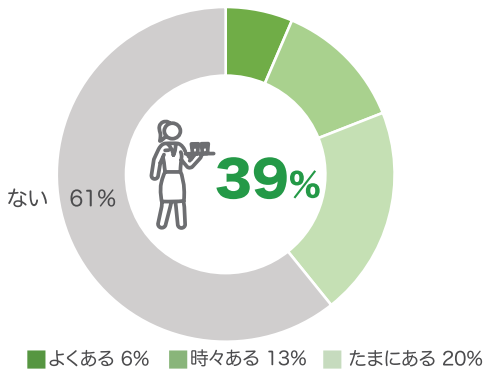
公共の場 (道路・電車・店・公園など)



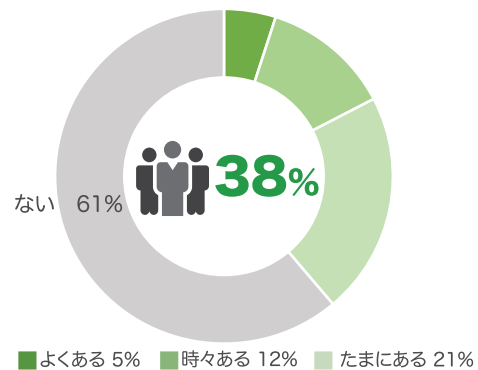
学校



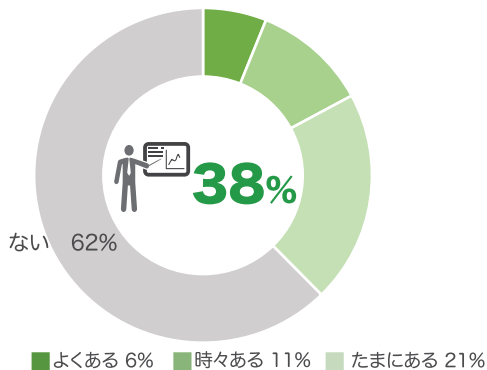
アルバイト先



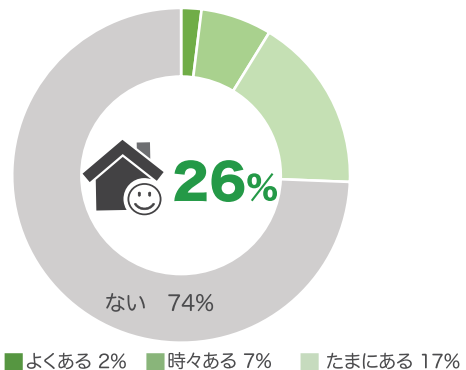
就職活動中



職場



家



みんなの声 どんな性的嫌がらせや性差別を受けているのか

インターネットで



直接的な性差別や嫌がらせを受ける

女性が男性に服従する性的描写を描いた漫画の広告。

痴漢などの性被害で、被害者の落ち度を探してそんな格好をしているからだ、男を誘う女が悪いなど誹謗中傷する。

SNSで知らない人から性的な話をされ不快になった。

フェミニズムに関する話題で議論がなされているとき、発話者が男性か女性かで反応が変わる。

メイクをしている男性へのバッシング。

公共の場で



公共の場では不快な広告 知らない人からの不快な言葉かけや嫌がらせ

女性を性的な目で見ているような広告をよく見かける。特に女性も乗る電車の中の週刊誌の中吊り広告。

ダイエットの広告で気にしていることをけなされている場面を最近良く見かけ、悲しくなる。

街中で中年男性に道を聞かれたので教えていたら、「彼はいるのか」「今から食事に行かないか」と言われた。

公共の場で知らないおばあちゃんから「女の子は家庭を守ることをすればいい。仕事なんてしなくてもいいの」と言われた。

女性のみを狙った、障害者手帳を使ったセクハラ・詐欺被害にあった。「もっと体を密着させて」「膝の下に手を入れて、俺のことを抱き抱える形で」と障害者手帳を見せられながら言われ、困惑したが恐怖でその通りにしてしまった。

タクシーの運転手(男性)に「暖房の温度を上げて暑くして脱がせようか」と言われた。

メディアで



いわゆる「一般的な女性像」を押し出した広告 女性であることを特別視することへの違和感

テレビ番組で女優にわざと下品な言葉を言わせている場面を見たことがある。

テレビでは男女問わず容姿の美醜について「美人すぎる〇〇」や「ブサイク」と言及しがち。

「女子力」と言ったり、家事に関することをわざわざ「頑張るママ」など性別を特定したりした言及が多い。

「オカマ」いじりも多い。

深夜ラジオ番組で、「他のラジオのファンは女の子ばかりだけど、うちのラジオは男しか聴いてないから最高!」と言うのをよく聞く。

アメリカのドラマで「女の子だから、歌手になるのではなくAV女優になりなさい」と強要されているシーンを見たことがある。

新年号を決めるときに集められた有識者の分類に「男性」はないのに「女性」があったこと。

学校で



無意識に発言される、差別や性的嫌がらせ

大学教授が「女性は男性より能力が劣っている」といった考え方で男子学生だけに将来を期待する話し方をしていた。

ゼミで何か発言しようとする「女は黙ってる」と言う人がいる。

胸が大きいのがコンプレックスですが、羨ましいと言われ、それについていじられたりします。

私は地方出身で大学近くに下宿しているのですが、新歓で男性の先輩から「一人暮らしの女子ってホテル代かからないからモテるよね～」と言われたことがあり、不快でした。

教員によるセクハラ。

アルバイト先で



「女の子だから」と扱われ、セクハラもある

手をなめられたり、「着替えをのぞいた」、「君でよく妄想してる」と言われた。

具合が悪くお腹をさすっていると「妊娠ですか?」とニヤつきながら聞かれた。

仕事を指示されるときに「女の子だから」と前置きされて仕事をもらうことがたまにある。

男性は力仕事、女性は事務仕事を任される。「女性なんだから早く帰りなさい」と言われる。夜遅くまで仕事をしていると「女性は心配」と言われる。

上司が陰で「女は働く量が少ないから雇いたくない」「働くなら男と同じく力仕事もしろ」そうじゃないと男女平等じゃない」と言っているのを聞いた。

職場で



男女の扱いや仕事の差を感じる声が多い セクハラ被害もある

仕事でお客様との交渉に成功すると、上司から「女性だから許してくれたんだ」と言われることがある。

職場の飲み会で若い女性はお酌係です。

お茶出しは女性しかしない。

職場の上司から、「可愛い声で返事してね」など、女性らしさを求められることがたまにある。

妊娠を報告した職員について陰で、「やっちまった」「新しい人を探さないといけないから面倒くさい」というような会話をしていた。

女性は、いずれ家庭に入るから、仕事に対する姿勢が男性と異なるという誤解をよくされる。

就職活動中



就活は、大学生年代があからさまに 女性らしさを求められる場の一つ

標準化された就活生の姿には、 服装からメイクまで女性らしいお手本が存在

業界によって女性だから受け入れてもらえなかったり、女性だから営業の仕事が制限されたりしていると聞いた。

女性は出世できないと言われてたり、営業職で応募したにも関わらず「女性には営業は難しいから」という理由で一般職を勧められた。

「結婚する予定はありますか?」と聞かれた。

女の子用の就職セミナー、女の子へのメイク指導、顔採用がある。

就職活動の女には化粧必須というのは性差別だと思う。

女性なら寿退社することも考えて採用の数を決めることもあると言われた。

家で



家でも安心できない環境がある 根深い性的役割の固定観念が消えない

叔父からのセクハラ。

父が家の中で後ろを通るときなど、必要もないのに肩や背中を触ってくる。

性的な嫌がらせの電話がかかってきた。

泣いてる子どもに「男の子でしょ、泣かない!」と叱っている。

「女は家事をするものだからパートなんて」と言う親戚。

「女の子らしく〜」と良く言われる。女の子らしくない私は女ではないのかいつも疑問に思う。

女性は、家庭を守る。男性は働くなどの固定観念。

女性が家事をしないといけない。

家で趣味のプラモデル作りをしていたり、料理やお菓子作りに興味はあまりないと言うと「女らしくない」と母に言われる。

性的嫌がらせや性差別の経験について 高校生年代と比較する

普段の生活での性的嫌がらせや性差別の経験について、「高校生調査³」と比較してみました。

右ページの図のように、何らかの性差別や性的嫌がらせを経験している割合は、**高校生が66%**に対し、**大学生は92%**でした。

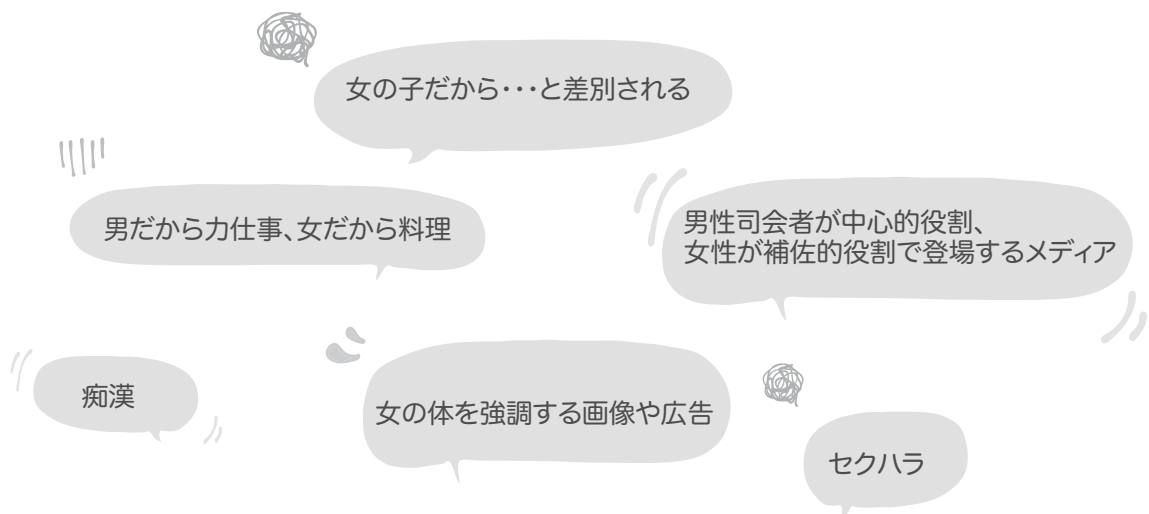
本調査での性的嫌がらせや性差別の経験者は、メディアで83%、インターネットで86%、公共の場で64%です。それに対し高校生たちは、メディアは49%、インターネットは46%、公共の場で30%でした。各項目で大学生の回答は高校生の倍以上となっており高校生と比べかなり性的嫌がらせや差別の経験があることがわかります。この差は大きな驚きです。自由記述には、大学生たちの声が、高校生たちの3倍も寄せられました。

大学生たちのほうが被害が大きい理由として、次のことが考えられます。

- ・ 大学生はバイトや就活で行動範囲が広い。
- ・ 20歳を超えて飲酒や喫煙などを含め、自由になる。
- ・ 服装や身なりの制限があまりない。
- ・ 一人暮らしなど親元を離れる人が増える。
- ・ いろんな背景や価値観の人に会う割合が高い。
- ・ 社会に潜むジェンダーの現実に触れる機会が多い。
- ・ ジェンダーに関して学ぶ機会があり、被害を認識する。

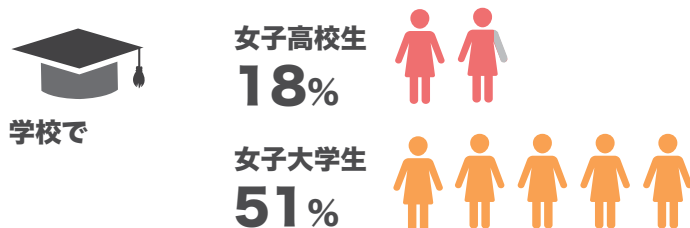
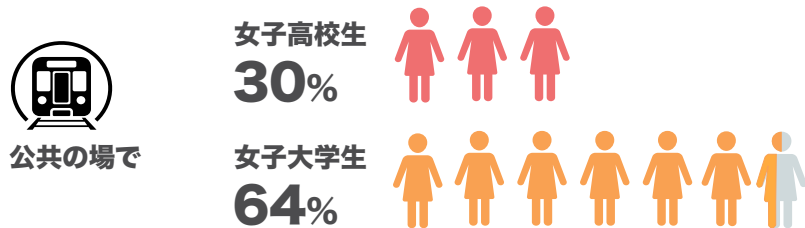
共通する「性差別や性的嫌がらせの経験」

自由回答の内容には、高校生と大学生の2つの年代で共通するものがありました。



3 ジェンダーに関する女子高校生調査報告書2019 ガールスカウト日本連盟

▶ 普段の生活で、性的な嫌がらせや差別を経験したり見たりする 女子高校生 n=524 女子大学生 n=536



「女の子」だから

66%が女の子だからという理由で何らかの制限、不平等を経験しています。

「不公平・不平等を感じた」「何かをしなくていいと言われた」には最も多くの回答がありました。仕事から家族との関わりまで、その内容は幅広いです。自由回答には強制・強要や制限、不合理を感じたこと、あきらめたり機会を奪われたことなどが多く寄せられ、女性たちに与えた影響は多岐に渡ることが容易に推測できます。

▶ 女の子だからという理由で、次のことを経験したことはありますか。

不公平・不平等を感じた / 何かをしなくていいと言われた / 何かをやらされた / 何かをあきらめた

特に感じたことはない

34%



女の子だからという理由で
何らかの制限を受けたことのある
女子大生

66%

女性たちは、社会が求めている女性像、そしてそれを押し付けられることに対し、違和感を覚えています。女性たちの感覚や期待に、人々や社会の意識は追いついていません。例えば、男性側が良かれと思っている行動に対し、女性は「実は差別だ」と感じていることがあります。

また「自分たち女性が下に見られている」と感じさせるものもあります。実際にはイヤだと思っても、それをイヤだと発言することは、一般的に求められる「女性のあり方」と違うこととなります。そのため、イヤだと発言することで周囲から反感を受けることに不安を覚える人もいます。実際、インターネットやメディアには、一般的な女性のあり方とは異なる言動をする女性に対し、バッシングが多くあります。そのような発信を目にすることで、自分の意見を声に出すことをリスクに感じる女性もいます。

女性の挑戦が難しくなる要因の一つには、それを支える仕組みが整っていないこともあげられます。結婚や出産でキャリアがリセットされることを不安に思ったり、諦めてしまう女性も多くいます。

不公平・不平等を感じた

38%



女の子だから最悪大学まで行かなくてもいいよね、みたいなことを言われたことがある。

民法ではどちらかが変更と定められているのに、結婚したら名字が変わるのは女性だと思われていること。

就活中はいつか地元に戻ると言われた。

男性より外見に気を付けなければならないという圧力があるような感じがある。

「女の子だからセンスが良いだろう」といった扱いや「女の子なのに字が汚い」といったことです。

おじいちゃんに「頭が良さそうに見えてしまうから、眼鏡をかけるな」と言われた。

男性ロックバンドのコピーバンドをしたかったが、女だからという理由でメンバーに選んでもらえなかった。

公的な場で、「男性がいた方が相手の構え方が違うから、同伴する」と言われた。

AO入試の面接で、「女性は産休や育休でどうせ途中で仕事を辞めるんでしょ？ それとも一生独身で働き続ける？」と圧をかけられるような発言をされた。

何かをしなくていいと言われた

37%



力仕事をしなくていいと言われた。

バイト先で女の人はあまり重い物は持たなくていいよと言われた。

配慮で言っていたているのもわかりますが…体力仕事や力仕事をやらせてもらえない。

女性である私も楽器を運べるのに、女性は運ばなくていいと言われ、役立たずと言われている気分だった。

お金を払わなくていいと言われる。

男性からご飯をおごられる。

女性がスポーツができなくてもかわいいから大丈夫、と言われた。

女の子だから無理する必要はないと言われた。

車の運転は男がすると言われた。

何かをやらされた

29%



親戚一同集まる場でのお茶くみやお酒を注がされた。

親戚が集まり、食事の準備をするとき兄は何も言われないが女の子である私はお手伝いを強要される。

海外に渡航したいと言ったら、女の子なんだから危ない、やめなさいと言われた。

女性は社会人になったら化粧をしなければならない。

アルバイト先で女性のみメイク、ストッキング、パンプスを強制される。余計な出費がかかるし苦痛だ。

飲み会のお酌。若い女の子がやった方がみんなが喜ぶからと、瓶ビールを目の前に持ってこられた。

料理のとりわけをさせられる。

営業職でも女性はお茶出しが基本という企業がある。

飲み会で男性の先輩に、若い女の子の方がいいから、上司の横に座れと言われた。

フォーマルな場でスカートをはかされる。

礼儀正しくすることを男性より強要された。

何かをあきらめた

15%



先生が女子の浪人に否定的で、志望校のレベルを落としてでも、何とかして現役で大学生させたがった。

将来を考える際、出産育児でキャリアアップが男性より見込めないから、仕事の選択をあきらめた。

女の子にこの仕事は無理だと言われ、仕事の選択をあきらめた。

防犯の意味で一人で行くのをあきらめている場所がある。

決定的に何かを諦めたわけではないけれど、常に“女の子”としているいな選択をしていて、その時々で自然と男の子だったら自然にやる選択を自分で排除していると感じる。

メンズファッションが好きだったが、女の子らしくせざるを得なかったため自分の好きな洋服を着ることをあきらめている。

したい業務なのに「これは男子がやるもので、今まで女子はしてきてないからできない」と言われた。

女性で研究者や医師は難しいと感じる。

大学の体育系の部活で女性はキャプテンになれない環境だった。

自分の身を守るために本当にやりたいことが制限されてしまう。



考えてみよう2. 性別による制限

Q. 自分の性別が理由で何かを制限されたことはありますか。

あなたの経験を書き出してみましょう。



47カJ だれがサラダを取り分ける？

私は、誰かと外食をするとき、みんなのためにサラダを取り分けるべきか悩みます。「気づいた人がやればいいじゃん」その通り！でも、ためらうのは、なぜか？

- ・サラダをわけると「女子力」をアピールしている感じに見える。
- ・飲み席では、女子として食事を取り分けるなどの役割を期待されていることを感じる。
- ・やったほうが良いんだろうと思うが、強制されている感じがしてやりたくない。

ためらうのは「サラダを取り分けるのは女性らしいよね」というイメージがついているから。一方、合コンなどでは、その期待されるイメージをわかったうえで、異性を前にすると積極的に取り分ける女子もいるようです。

その期待や行動には、ジェンダーバイアスがかかっているとわかったうえで、どのように行動するかは、人それぞれです。今まで女性らしい、男性らしいとされてきた行動をどうするか悩んでいる人は男女ともに多いのではないのでしょうか？

06

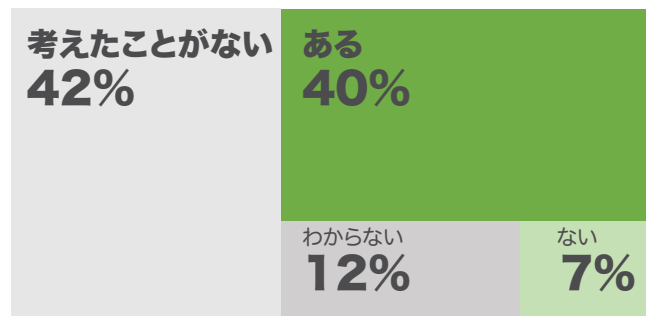
メディア×ジェンダー

日頃、私たちはいろいろなメディアに触れています。テレビや新聞だけでなく、雑誌や広告、映画などもメディアの種類です。

メディアでは、男女は平等か

女性たちは、家庭や進路決定、日常のさまざまなところで、男女が平等に扱われていないと感じていることがこの調査でわかってきました。それではメディア上ではどう扱われているのでしょうか。

▶ メディアの女性に対する表現で、おかしいと思うことはありますか。



今回の調査で、「メディアの女性に対する表現でおかしいと思うことはありますか」という質問に対し42%の女性が「考えたことがない」と回答しました。一方でおかしいと思うことがあると40%の人が回答しました。このことからジェンダーの視点でメディアを見る意識がある人とない人に二分されていることがわかりました。

「日常生活×ジェンダー」の章であったように、多くの女性がインターネットの次にメディア上で性的な嫌がらせや性差別を経験しています。スマートフォンを筆頭として、日々情報に触れることができるからこそ、メディアが日々私たちのジェンダー概念に大きな影響を与えています。しかし、この違和感に気づかない女性がいるということも明らかになりました。

日本はこれからどのようにメディアと付き合っていくべきなのか、考えていかなければならないのではないのでしょうか？



考えてみよう3. 理想の女性は、どんな人？

▶メディアは「理想の女性像」「理想の男性像」を作っていると思いますか。

あてはまるものを丸で囲んでください。

思う ・ 思わない ・ 考えたことがない ・ わからない

▶「思う」を選んだ人は、どんな場面で理想の女性、男性が描かれていると思いますか。

たとえば、外見、性格、職業、得意なこと、行動、服装などを具体的にあげてみましょう。

メディアのここがおかしい！

外見について



女性の衣装はだいたいスカート。

スポーツや文化など他の分野で評価されるべき女性もすぐに「美人○○」などともてはやされること。

容姿は関係のない話題であっても、「美人議員」や「美人アスリート」といった表現が多すぎる。

見た目が関係ないニュースでも、男性がその被害者に対して「綺麗な人だから仕方ない」などという。

男性○○という表現がないのに対して、女性○○や美人すぎる○○等の表記がされる。

女性にとって細くてかわいいことだけが美の基準のように伝える。

選挙中、女性議員候補者のファッションチェック！という記事があって不快感を持った。

結婚・出産、仕事について



女性のアスリートに対し、結婚の予定などを聞いていること。

高校女子サッカー選手権キャッチコピー「サッカーに恋した3年間」

メディアの言葉遣いでよく見るが、男性の医者の場合は「医師」というが女性の医者の場合は「女医」「女性の医師」となる。まるで女性が医者であることが普遍的ではないかのような特徴づけをすること。

女性は家事育児など、小さい子が見るようなアニメにもジェンダーバイアスの表現が多い。

家事・子育て関連のコマーシャルには母親のみしか出ないことが多い。

イクメンという単語は、父親は本来子育てをする必要のない役割だという認識のもとに作られたような気がして引くかかる。

芸人について



女性芸人が「痴漢は許せません」と言うと、男性芸人が「痴漢にあったことあるの？」と聞き、「ないです」答えると笑うようなところ。

女芸人さんと女優さんで扱い方が違い過ぎる。

芸人だろうと女優だろうと同じ女性。やらせて良いこと、悪いことがあるはずなのに、見ていて不快です。人の体をもっと大切にすべきです。



メディアは女性の外見について取り上げすぎだ。



メディアは非現実的な理想の女性を作り出している。

メディアは理想の女性像を作っていると思うか」という質問に、「ある」と回答した大学生の女性は**54%**でした。その次に多かったのは「考えたことがない」で24%いました。この質問では、メディアは実際にどのような女性の理想像を作っているのかも自由に答えてもらいました。回答した女性たちは、メディアからどのような理想像を求められていると感じているのでしょうか。それは大きく分けて二つありました。

1. 外見や態度に関すること

美しく、スタイルがよく、笑顔

痩せていて、美人であること

見た目や仕草は美しくあるべき

2. 性格や役割に関すること

優しく、気遣いができる、家事ができる

料理上手で家事ができ、子育てをする

女子大学生たちの半数以上は「メディアは、女性の外見について取り上げ過ぎだ」と感じています。そのため、女性は男性よりも外見に対するプレッシャーを強く受けるのかもしれない。

メディアがつくる「理想の女性像」により、多くの女性は社会からさまざまなプレッシャーを受けています。人々が無意識のうちに理想の女性像を描くのは、メディアによる影響も大きいでしょう。私たちは、女性だからといって、美しく、料理上手で家事ができ、家庭を優先する必要はなく、仕事を諦める必要もないのです。

女性が無意識のうちに理想の女性像に影響され、自分で人生の選択ができなくなっていることを社会に知ってもらう必要があるのではないのでしょうか。そして、私たち自身も影響されていることを自覚する必要があると思います。



イワカ

おとぎ話に隠された真実に気付く

ディズニーの「シンデレラ」や「白雪姫」などのプリンセス映画。誰もが知っている有名なものばかり。そしてこれらは必ずお姫様と王子様は愛で結ばれるというハッピーエンドを迎えます。今までこのような恋愛や結婚を夢見たことはありませんか？ 私は小さいころお姫様に憧れて、毎日のようにプリンセスのドレスを着ていました。

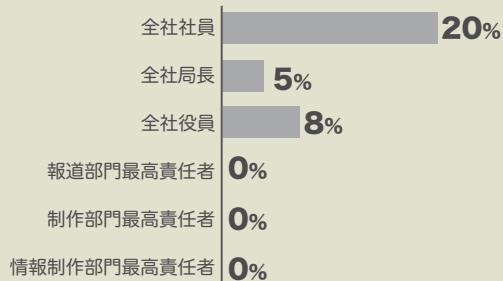
しかし、大人になってから見てみると物語のおかしさに気づくようになりました。それは、プリンセスたちは必ず王子様が現れるのを待っているのです。さらにプリンセスは王子様とあったこともないのに瞬時に結ばれることも茶飯事。これはファンタジーではありますが、今でも私のようにプリンセスに憧れたり、少なくともかわいいなと思う人はいると思います。この誰もが無意識の内にかかってしまうメディアの魔法について見直してみることは重要ではないのでしょうか？

メディア業界のジェンダーギャップ

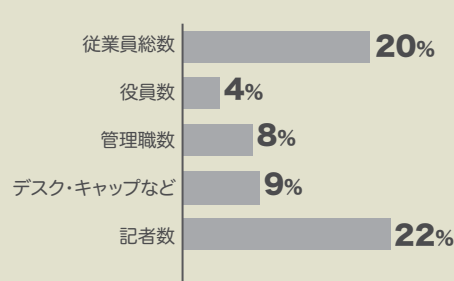
では、なぜメディアは、私たちに非現実的な女性像を押し付けたり、女性たちが不快に感じる内容を発信するのでしょうか。このことについて考えてみたいと思います。「202030」を聞いたことがありますか？2020年までに社会のあらゆる分野において、指導的位置に女性が占める割合を少なくとも30%程度に」という政府の目標です。

下のグラフにあるように、在京テレビ局や全国の新聞社の社員の約80%は男性です。そして、管理職になるほど女性は少なくなり、わずか一桁です。驚くのは、在京テレビ局7社すべてで最高責任者は男性です。テレビで見る番組の内容は男性が決定している、ということがわかります。新聞では女性記者は2割程度いますが、紙面に載せる内容を決定したり教育的立場（デスクやキャップ）に女性は1割もいません。

在京テレビ局の女性の割合⁴



新聞41社の女性の割合⁵



私たちはメディアを経て、情報を知ることができ、それは意見を形成する礎になります。日々何を伝えるか、どんな視点からの記事にするかはメディアで編集する人が決めていきますが、そこが男性中心である場合、取り上げるテーマやものの見方が偏ったり、記者が（無意識である場合も含め）女性に対する偏見を持っている場合、それがそのまま記事に反映される、ということが起こります。女性が増えると、前ページにあるような女性の描かれ方は減るのではないのでしょうか。

4 在京テレビ局女性割合調査報告 民放労働女性協議会 2019年10月

5 メディアの女性管理職割合の調査結果 日本新聞労働組合 2020年3月



17カ所

あるテレビ局女性記者の話

最終的に番組の方針や構成を決めるのはディレクターで、全員男性です。どうしても男性目線で番組がつくられがちです。こういうことを取材したいと言っても、なかなか認めてもらえない。こういう風に伝えるべきと思っても、変更されたりします。確かにテレビ局に就職する女性は増えているけれど、大きな局では女性の発言力は低く、嫌になってやめてしまう方が多いですね。そうすると女性がますます減ってしまう。残念です。メディアが男性中心でつくられていくことで、ジェンダーバイアスがかかってしまい、どんどん視聴者の感覚と乖離して（^{かいり}）いってしまうのを心配しています。

何かよくないことがあると視聴者からたくさん意見をもらうけれど、良い番組のときにも声を送ってもらうとありがたいです。そうすると「視聴者はこういう内容を求めている」ということを男性たちに示すことができます。みなさんの求めているメディアに変わっていくと思います。

メディアの取り組み 日本

日本のメディアでは、ジェンダー格差が著しい反面、改善に向けた動きもあります。

アンステレオタイプ・アライアンス日本支部立ち上げ⁶

国連女性機関であるUN Women日本事務所は2020年5月、日本アドバイザーズ協会(JAA)と日本経済新聞社の協力を得て、アンステレオタイプ・アライアンス日本支部を立ち上げました。同所長の石川氏は、広告とメディアがジェンダー平等達成の上で大きな阻害要因となっていることを憂慮し、ジェンダーのステレオタイプやアンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)に取り組みを進める上で、画期的な力となる、と期待を語りました。

朝日新聞社ジェンダー平等宣言

朝日新聞社は2020年4月、ジェンダー平等宣言を発表し、性別などの偏りが出ないようにするなどの取り組みを始めました。

メディアの取り組み イギリス

イギリスでは、「メディアによるジェンダー観への影響は大きい」と問題意識が広がっており、以下2つの取り組みがおこなわれています。

報道：イギリスBBCの50:50⁷

イギリスの公共放送局であるBBCは、2018年4月からメディアでの男女の割合を同一にする「50:50キャンペーン」をおこないました。このチームの働きにより、BBCでの女性の露出率が大幅に上がりました。このキャンペーンは、ある日のニュース番組のコメンテーターがすべて男性であることに制作者側が気づいたことから始まりました。結果として、1年で74%の番組で女性が50%以上を占めるようになり、BBCだけではなく20のメディアで取り組みが拡大しています。BBCは国際放送なので、日本でも見ることができます。ぜひ一度確認してみてください。

広告：性差別CMを禁止⁸

2019年06月から広告基準協議会(ASA)により、広告のジェンダー表現を規制が施行されました。これはテレビ広告だけでなく、インターネットやソーシャルメディアの広告にも適用されます。

例えば、こんなCMは禁止されています。

- ・男性が休み、女性だけが家事をしている
- ・女性は車運転が男性より苦手
- ・男性は女性よりも子育ての能力が低い
- ・子どもを産んだばかりの女性が、心の健康より外見の美しさや家事に気をを使うなど



6 国連機関であるUN Women日本事務所が発表 2020年5月19日

7 BBC 50:50プロジェクトに関するレポートより 2019年5月5日発表

8 イギリス広告業界の自主規制組織である広告基準協会 Advertising Standards Authority(ASA)による規制 2019年7月より

メディアについて次のような報告⁹がありました。

映画も広告も、男女はアンバランス

映画：

日本やアメリカなど世界20カ国で興行成績の高かった、56本の映画に出てくる1,859人の登場人物を分析

登場人物とセリフの長さを男女で比べるといずれも**女性は33%**で、**男性の67%**に対し、およそ半分。登場人物のうち、女性が政治家や経営者などのリーダー的な立場として描かれるのは27%と、男性の42%より大幅に少なく、そのうえ、リーダーとして描かれる女性は、より露出の多い服装や、性的な対象として強調して描かれる傾向がある。

広告：

2018年、世界23か国の133の広告を分析

登場した人物のうち、女性は全体の40%で、露出の多い洋服を着ているケースが男性よりも3倍、多い。

この分析を手がけたアメリカの「ジーナ・デイビス・メディアにおけるジェンダー研究所」の所長 マデリーン・ディ・ノンノ氏は、女性が性的に描かれることで、それを見る少女たちの自尊心の低下につながることを懸念し、次のように話をしています。



女性に主体性がないような描かれ方は、「有害なステレオタイプ」だ。男女の不平等が強調されて取り上げられることに対して、男性は神経質になっている。だからこそデータや事実を示すことで、身構えることなく議論ができると考えている。¹⁰

マデリーン・ディ・ノンノ

⁹ 国立女性会館 グローバルセミナー ジェンダーとメディア 2019年12月6日

¹⁰ NHK メディアの“呪い”は解けるのか 2019年12月23日



考えてみよう4. メディアを分析してみよう。

▶ **皆さんの周りにあるメディアについて分析し、データや事実を見つけましょう。**

分析するものは、テレビ番組(ニュースやドラマ、バラエティ、アニメ等)、新聞(一日分)、
ニュースサイト、雑誌(一号分)など、なんでもかまいません。

分析したもの:

月 日 放送・発行

女性

人数

職業や役割

性格や服装など

男性

人数

職業や役割

性格や服装など

他に気付いたこと

07

生理用品×ジェンダー

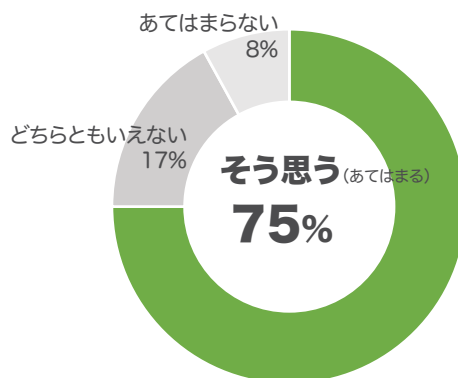
生理用品は女性にとって必需品

生理は女性にとって月1回起きる体の変化です。その体の変化について社会が寛容でないことに対して問題意識が高まってきています。しかし、今回の調査でも、38%の人が未だに生理のときに「学校や職場で配慮が得られないときがある」と回答しています。

日本では、2020年4月現在、生理用品は10%の消費税がかけられています。しかし、私たちは、食べ物や新聞のように8%の消費税で購入できるようになったらよいのではないかと考え、アンケートで質問を投げかけました。

結果として、約75%の女性が生理用品を軽減税率の対象にすべきだと回答しました。

▶ 生理用品が軽減税率の対象になるべきだと思う。

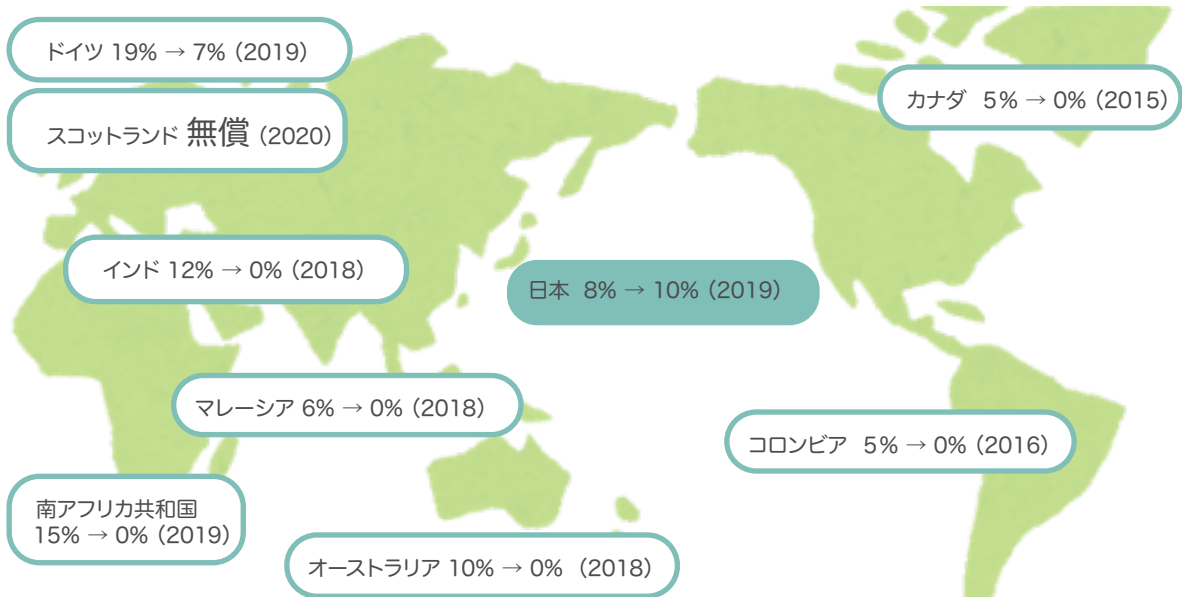


しかし、世界に目を向けてみると生理をどうサポートするかという議論は、生理用品に対する消費税にも拡大していました。私たちが、アンケートを実施する時点では軽減税率の適用についての意見を同年代に求めましたが、右上のように世界では税率軽減どころか、非課税とする動きがあることがわかりました。イギリスでは生理用品への消費税が撤廃され、スコットランドでは無償化されることが決まっています。



生理用品 世界の税率 現状

世界では生理用品を減税対象にする動きがあり、無償化運動を推進している国もある。



イ7カJ 世界では減税、無償化の動き

現在世界では「生理の貧困」という言葉がよく使われています。これは貧困により、生理用品を手に入れることができない人のことを指し、イギリスでは約10人に1人いるといわれています。

そして、イギリスを中心に生理用品を無償にする運動が起こっています。

世界では、生理用品を減税する動きがあるのに、日本では消費税の増税に伴い増税されていることに違和感を感じます。

スコットランドのガールスカウト¹¹ 生理用品無償化運動を推進

2020年2月にスコットランドでは世界で初めて生理用品が誰でも無料で手に入れられるようになりました。#FreePeriodProductsというハッシュタグでSNS上でも運動は大きく盛り上がりました。その中でスコットランドのガールスカウトも中心に運動を推進しました。



11 スコットランドのガールスカウトは「Girlguiding Scotland」

BBCニュースサイト（英語）

08

まとめにかえて

女子大学生たちが求めているもの

ジェンダーという言葉そのものは女子大学生の中に浸透してきています。しかし言葉だけが一人歩きをしてしまい、その言葉の意味や現象を理解しきれていない女子大学生が多くいることも考察できました。進路を選ぶ際には多くの人がキャリアを優先したいと述べていました。しかし、もし出産を迎えたら、仕事を変えたりやめたりしなければならないだろうという将来設計をする人が多く、女子大学生の理想と現実がアンケート結果に出ていました。

女性たちが、進路を選ぶときのみならず、日常的に「ダブルスタンダード」に悩んでいることを見ることができました。例えば、お茶くみをする、サラダを取り分けることなど、「女性らしい」と見なされる行動をするかどうかを考えなければなりません。しかし、そもそもその行動は周りを思いやった行動であり、その人が「女性らしい」かどうかを計るものではないはずです。

インターネットやマスメディアで性差別や性的嫌がらせを見たり経験したりする場面が多いにもかかわらず、男女平等かと聞かれると「考えたことがない、わからない」という回答が50%を超えました。メディアが私たちのジェンダー観に与える影響を考える機会が必要ではないでしょうか？

女性たちが感じるさまざまなプレッシャーを軽減することはできないのでしょうか。女性も選択できる社会にするという言葉を実践的なものにするためには、社会にある女性に対するさまざまなイメージを取り払うことが非常に重要になってきます。

この報告書を読んで気付いたことや、自分にも何かモヤモヤすることがあるなど感じたら、それをあなたの友人、知人に話しませんか。そうしたあなたの行動で、友人が自分の中にあるジェンダーの偏りに気づく機会になります。「おかしい」と思ったことはまず信頼できる家族や友達、恋人に話してみることです。あなたの実体験と感想がどんな話よりも一番影響力があります。


もし、あなたの話を真剣に聞いてもらえないことがあれば、この報告書を使ってください。「おかしい」と思っているのはあなただけではないことがわかってもらえるはずです。

今回は女性のみを対象にして調査をおこないましたが、男性もジェンダーによって苦しんでいる現状が垣間見えます。ジェンダーの問題は未だ女性間で話し合われがちかもしれません。しかしジェンダー平等は男性・女性などの枠組みを取り外す考えです。決して女性だけのためのムーブメントではありません。性別を超えて多くの人と、この問題について考えていく必要があります。

最後に、私たちが一番伝えたい三つのことを挙げます。

1. 女性も自由に進路選択できる社会になってほしい。一緒に声をあげよう!
2. 身の回りのジェンダーや性別役割分業に気付いていこう!
3. メディアから影響を受けていることを自覚しよう!

そして、自分の価値観をしっかり作ろう!

 **性別で可能性が狭まることのない社会を実現させるために
私たちの年代から働きかけ、
よりよい社会を一緒に作っていきましょう!**

09

あとがきにかえて

それぞれの思い

当たり前を疑う (19歳)

これは私が今回のプロジェクトに参加して一番学んだことです。例えば、「おむつ台はなぜ女性のトイレにしかないの？」という疑問。確かに、赤ちゃんのおむつは女性だろうが男性だろうが、どちらが代えても問題はありません。しかし、「育児をするのは女性の仕事」という考えが根付いているため、多くのおむつ台は女性トイレに付いていることが多いように見受けられます。このように、私はこのプロジェクトに参加したことで日常の当たり前を疑うことが増えました。

最近見たドラマで、「男性を通じてしか社会と繋がれない女性にはならないください」というセリフがありました。私は、このセリフから女性の活躍が期待される社会に未だに女性の自立を妨げることがあるのだと再認識しました。

私が悲しいと思うのは、本当はいろいろな選択肢があったのにも関わらず、「知らない」ということを理由に一つの答えしか出せないことです。「女性だから」という理由でできないことがあったり、社会のマイノリティーになったりするの、とても不平等なことです。

この現状を同年代の人に伝えたい！という思いで、このプロジェクトに参加しました。これからの未来を背負う、私たち大学生年代の女性たちに、ジェンダーについて知ってもらい考え方に変化が生まれるきっかけとなったらとてもうれしいです。私たち大学生年代が変われば、社会に少しずつでも変化を起こせると思います。私は、仕事・結婚などのさまざまなライフイベントを女性が「自ら」「納得して」選択できるような社会を期待します。

🌀🌀 メディアのジェンダー感 (20歳)

制作側と私たち視聴者の間にギャップを感じることはないでしょうか。テレビやラジオ番組で、女性らしさ男性らしさを過剰に取り扱ったコーナーがあります。私は好きなアーティストがそれらに出演していると、人質に取られたような感覚になります。彼らを尊敬しているだけに、バラエティーとして笑っているところを見ると少し胸が痛みます。SNS上でもそういった番組に批判的な意見が集まることがあります。調査報告にもあるように、メディアの制作の多くで男性の意見が反映されてしまうのです。このギャップに気付いている人はいるのに、社会はなかなか変わりません。

今回の大学生調査では日常の性差別やいやがらせを感知している人、回答しながら気付く人が多くいたと感じました。私たちの世代から新しい意識を常識に変えることもできると思います。この報告書を通じて、よりたくさんの方が現代のジェンダー問題に気付き、みんなで誇れる社会になれば幸いです。

🌀🌀 わたしは結婚したくない (23歳)

そう言うと、ほとんどの人に、「そういう人に限ってすぐ結婚するんだよね〜」とか、「結婚したいと思えるときが来るよ、大丈夫」とか言われます。私はフリーターですが、「早くいい人見つけちゃえばいいもんね」「結婚すれば稼ぎなくてもいいもんね」というようなことを言われることもあります。結婚をしていない人のことを「売れ残り」ということもありますよね。「結婚をしない」という選択は、悪いことでしょうか？もちろん、結婚をすることが悪いとはまったく思っていないです。ステキなことだと思います。でも、結婚する人もいれば、しない人もいるし、離婚する人もいます。人それぞれだし、とがめられることではないと私は思っています。

今回の調査で、結婚をしたくない、と考えている人が10%いました。私は仲間を見つけたような気がして、少しうれしかったです。違う考えの人もいれば、同じ考えの人もいます。あたりまえのことですが、実感することができました。この報告書で、同じ考えの仲間や、新しい考えに出会ってもらえたらうれしいです。甘い考えかもしれませんが、どんな生き方も認められて、みんなが生きたいように生きられるようになったらいいなと思っています。

🌀🌀 わたしはフェミニスト (22歳)

私は、大学でジェンダー学を専攻していました。しかし、実は「私はフェミニストです。」と言うことに不安を感じます。人前でジェンダーの話題を話すことが難しいと感じることも多くあり、なんだか「フェミニスト」と名乗ることのハードルが高くなってきている気がしています。それは、まだ私はフェミニズムのすべてを知らないから、名乗る資格なんてないと感じてしまうからかもしれません。

しかし、この問題を解決したいという思いを肩書きで表明することのほうが重要だと気付きました。そのときから私は、自信をもって「フェミニストです。」と言えるようになりました。「フェミニストでありたいという思いのある人」が将来的にみんな「フェミニストです。」と名のり、このムーブメントがより多くの人に良い影響を与えられるようになってほしいです。この報告書を読んだあなたにもそんな気持ちになってもらえたら嬉しいです。

10

ガールスカウトは必要なのか

🔗 なぜ、女性だけで活動するのか。

ガールスカウトは、世界最大の少女と女性のための社会教育団体です。

女子校や女子大が共学になったり、ボーイスカウトが女性を受け入れている中で、ガールスカウトこそ男女平等に反しているのではないか、という声を聞くことがあります。ガールスカウトが誕生してから100年以上たった今でも、女性だけの団体として残っていることに違和感を感じる人は多いかもしれません。でも、こんな時代だからこそ、女性だけの団体、ということに意味があると思います。

無意識にあるジェンダーの偏りは、簡単になくすことはできません。ガールスカウトでは、何をするのもすべて少女や女性です。役割を分担するとき、男性だから、女性だからといった固定観念はありません。リーダー役をするのも、力仕事をするのも、全て女性です。

大学や社会で経験するような、「女の子だから～」「女の子なら～」という場面はありません。女性だけで活動するからこそ、本当の意味で性別にとらわれない、個性を生かした活動ができるのではないのでしょうか。

そして、女性のための団体だからこそ、女性ならではの問題についても、真剣に、安心して考えられる場になっているのではないかと思います。

女性のための団体である私たちが、女性の声を集めて、世間に届けていきたい。

より多くの人に伝えていけるように、私たちはこれからも発信し続けていきます。

2020年7月

公益社団法人ガールスカウト日本連盟

大学生調査2020 ユース実行委員

海野友希乃 松本堇 結城萌 志村恵実

サポーター

Stop the Violence委員会 調査担当チーム

河合千尋 篠宮さおり



わたしが変わる。
未来が変わる。

girl scouts

発行：公益社団法人 ガールスカウト日本連盟

〒151-0066 東京都渋谷区西原1丁目40番3号

<https://www.girlscout.or.jp/>

この資料に関するお問い合わせ stv@girlscout.or.jp

2020年7月20日 発行

定価：1,000円(税別)